

校長室より

令和4年11月28日(月)

「ワールドカップ日本対ドイツ」



中東の国カタールで行われているサッカー・ワールドカップ。アジアの代表として出場している日本は、11月23日に1次リーグの初戦をヨーロッパの代表ドイツと戦いました。ドイツと言えばヨーロッパの強豪であり、ワールドカップの常連国。ましてや過去4回の優勝経験を誇ります。もちろん、世界ランキングも11位と日本の24位をはるかに上回ります。

いよいよ試合開始。前半、日本は劣勢で、ボールをほとんど持たせてもらえず、放ったシュートはわずか1本でした。前半をなんとか1失点で終えた日本は後半に見違える姿を見せます。攻撃的な選手を次々と投入するやりズムは日本に傾いていきます。そして、ついに日本は後半30分と38分、たて続けにゴールを奪うと、ドイツの猛攻をしのぎ2対1で勝利したのです。

メディアには「歴史的勝利」、「ドーハの奇跡」…などいろいろな見出しが飛び交いました。そこで、その快挙の裏にあるものを監督・選手の試合後インタビューから探ってみました。

森保監督「選手たちが一丸となっていていい準備をして粘り強く戦ったことで勝利につながった。多くのサポーターが後押しをしてくれた。一喜一憂せず、終わったことを反省して次の試合の勝利に向けて戦いたい。」

浅野選手(途中出場)「自分がピッチに立てば100%プレーすることだけを意識していた。チャンスがあればシュートを打つというのはずっと決めていた。みんなで勝ち取ったゴール、そして勝利だ。」

堂安選手(途中出場)「俺が決める、俺しかいないという気持ちでピッチに入った。」

三笥選手(途中出場)「まだコンディションは100ではないが、次の試合に向けてチームのために自分のできることをやっていきたい。」

他の選手たちのコメントも、次の試合を強く意識したものばかりで、勝利に酔いしれている選手は誰一人いませんでした。この心の強さがわずかにドイツに勝っていたのかもしれない。

